

子どもたちの未来に 魅力的な空を残したい 旅行者、航空機オーナー、 パイロットの三者が win-win の関係を シェアリングで実現

進藤 寛也 (しんどう ひろや) さん

(株)エアシェア 代表取締役CEO

北海道帯広市生まれ。釧路工業高等専門学校、信州大学、同大学院で学ぶ。愛知県でエンジニアとして仕事をしてきたが、東日本震災後の2011年に家業の進藤鋳造鉄工所を継ぐために帯広に戻る。2016年(株)エアシェアを立ち上げた。36歳。

北海道に移住（I・U・Jターン）して、新たな取り組みを行う輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーかとうけいこさん。9回目は、帯広市在住で空を舞台に新たなサービスシステムを生み出した進藤寛也さんです。

空、そして飛行機との出会いを教えてください

自宅近くに自衛隊があってそこに離着陸するヘリコプターが身近でした。子どもの頃よく空を見上げていました。憧れていたのかもしれませんが。編入した信州大学では、グライダーの操縦ライセンスを取得し空を飛ぶことを体感しました。ふわっと浮く感覚、慎重に着陸する緊張感が最高でした。

航空機のシェアリングを考えるようになったきっかけは

日本国内には700機を超すセスナなどの自家用航空機が登録されています。そのうち250機程度がいつでも飛べるように整備されているのに、ほとんどが飛ぶこともなく地上で翼を休めていることを知りました。さらに、パイロットが足りていないという報道を見聞きしていました。

自分も資格保有者として、資格を取るまでの費用、期間がどれだけかかるかを知っています。また、プロとしての資格を保有したまま就職できない若手の有資格者が1,000人単位で存在していると知り、航空機というハード、パイロットというソフトの資産、これらの遊休資産を有効に運用するスキームを提供しなくてはもったいないと思いました。加えて、全国に存在する

140以上の滑走路・農道離着陸場を活用すべきと以前から考えていて、自分が今、こうして新たな挑戦をすることで、交通アクセス困難地域が多い北海道に貢献することもできるのではと考えるようになりました。

エアシェアという会社について教えてください

まず、当社はITサービス企業であって、航空事業者ではないことをお伝えしたいです。航空機オーナーと、パイロットと、旅行者をつなぐプラットフォームなのです。

これまで、航空機とパイロットのシェアリングエコノミーは法規制の観点から不可能だと考えられてきたのですが、2016年から慎重に調査・研究・開発を重ねてきました。国土交通省と数多くの調整を行い、日本初の適法性と安全性を認められたサービスとして、2020年1月にサービスを開始したところです。

既存のエアラインや鉄道網などと組み合わせて、ベストパフォーマンスとなるように利用していくことが、旅行者にとってもエアシェアにとっても、パイロット、航空機のオーナーにとっても最善であると考えています。また、従来の交通手段やアクティビティに加え、新たな選択肢として移動を遊びの一つとして楽しむことを提供していきたいと考えています。

エアシェアの仕組みを教えてください

例えば、名古屋空港から能登空港までなど、地点移動のためのプランを作成する機能に加え、同空港を発着する遊覧フライトを楽しむためのプラン作成機能をWEB上で可能にしました。

旅行者はサイト上で搭乗する人数や日時、目的地、航空機、パイロットを選びます。その中からパイロットと航空機オーナーの条件が合致すればフライト成立となり、景勝地や夜景などをプライベート飛行することが可能になります。移動のためのフライトに比べ利用時間が短いため、安価に利用できるケースが多く、特別な体験や記念旅行をされたい方などにオススメです。

*インシデントとは「事件（ミス）」アクシデントとは「事故」です。事件（ミス）があったが事故に至らなかった場合がインシデントであり、事件（ミス）が事故に至った場合がアクシデントということです。
<https://resilient-medical.com/incident/incident-accident-difference>より引用

小型航空機は、4人から6人程度が搭乗できるプロペラ機やヘリコプターで、移動時間1時間で1機あたり5万円から10万円の料金を想定しています。

エアシェアが目指すのは、気軽な空の旅ですか

はい、そうです。「エアシェア」を立ち上げた目的は、これまで触れるチャンスも知るチャンスもなかった、セスナやヘリコプターなどの小型航空機を有効に活用するために誰でも気軽に乗れるサービスの提供です。『高そう』『落ちそう』『怖そう』といった、セスナやヘリコプターなどの小型航空機へのネガティブイメージを払拭したいです。家族や恋人とのナイトクルージング、ちょっとそこまで空中散歩など、エアシェアで空を自由に移動できる社会を目指しています。航空機オーナーやパイロットが当たり前のように行っている「好きな時に好きな所から、好きな所へ飛ぶこと」が誰にでもできるアクティビティ、交通手段となるはず です。

最初は自分の暮らすまちの空港発着の体験飛行から始めるのが良いと思います。その後、ビジネス利用、医療などの活用へと進むのが、今後の方向性ではないかと考えています。

今後に向けて

パイロットは20人が登録し、航空機は15機です。どちらも拡大を目指して、理解してくれる航空機オーナーとの出会いを繰り返しています。年間フライト目標は100にしています。ただ、残念ながらコロナの影響で事業計画は見直す必要があります。また、安全対策の充実を図る目的で、手持ちの金属探知機やアルコールチェッカーを航空機オーナーに配布し、機体に備えてもらいます。パイロットはこれらを利用し、乗客がナイフなどの危険物を持ち込んでいないか、乗務前にアルコールの影響がないか等の検査に利用していきます。

(2020年7月取材)

インタビュー後記

「事故やインシデント*が起らず、無事ミッションを遂行できることが“安全”。何よりも安全を優先する」という考えの下システムを作っている進藤さん。そのうえで、「もっと自由に空を移動し、楽しむ未来のシーンを作る」というコンセプトを持って事業を進めています。地方から地方への直接移動が実現できるかも…。エース登場の予感がしました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表